# カール大帝の巡幸における移動経路

尾籠恭平

## はじめに

中世初期社会経済史について大幅な進捗が見られた中、流通についての研究も多様な見方を持つようになっている。しかし流通についての研究の大部分が生産と関連し、物品にその関心の大部分をさいており、特に輸送についての研究が少ないように思える。その方法についても水路が中心であり(一)、陸路の利用について否定的な研究も少なくない(二)。今研究ではヒトの移動を、特にカール大帝の巡幸を手段から見ることによって中世初期における移動についての代表例として見ていきたいと思う。

## 巡幸について

ドイツにおける中世国家は定まった首都を持たず、各地に散在する王宮を巡歴し、王国会議や教会会議を開催し、国王文書の作成・発給を行っていた。巡幸王権の移動ルートを特定するための基本史料となるのが国王証書と年代記である(三)。国王証書には場所と日付の記載があり正確な復元を行うことができる。年代記においても軍事行動、議会の開催場所についての記述があり、この二つを組み合わせることにより精度の高い復元を行うことができる。カール大帝の治世期には絶え間のない争いにより、一定の周期でもって軍事行動を行うことが恒であった。特にクリスマスから復活祭までは冬期の王宮とし、夏の間に多くの旅を行った。ロワール―ライン間には多くの宮廷と王領地があり好んで滞在している。

しかし巡幸経路は滞在地と滞在地を直線で結んだものであり、交通手段を検討するには適さない(四)。本稿では「フランク王国年代記」を用いカール大帝の巡幸手段において記述の少ない水路を簡略化し表として取上げた。なお国境となった河川にまで進軍したという記述は、陸路を利用したのかについて明確ではないため省いた。

## カール大帝の巡幸における陸路と河川

〈表〉は帝国年代記において河川を利用したものを表としてまとめたものである。注目すべきは七八九年、七九一年の記述である。橋を整備していることからザクセンにおいて道路が軍事行動に耐えられずに進軍を中断したことを意味しているように思われる。一定のルートでの行動は安全な進軍経路を確保することも目的であった。ザクセン戦役において重要な拠点となったエレスブルクには多数の王領地が存在し、進軍経路を確保できていた(五)。

特に七九一年のアヴァールへの遠征においての記述は陸上交通と水上交通の併用であるが、「王国年代記」においての記述は一つのみである。また七九〇年の一例を除けばカール大帝の治世中において河川を遡航した記録を見いだすことはできない。川を下る場合陸路よりも早く移動することができたと考えられているもののカール自身の利用は三例にとどまっている(六)。これにはカール大帝の軍

事行動は河川沿いにある拠点の攻略が見られるものの、河を横断し内陸に進軍していたためと考えられる。フランクフルトはラテン語でフランク人の徒渉地を意味するFrancorum vadusに由来することから(七)、度重なる行軍において浅瀬で徒渉した場合に年代記が記述していないと考えられる。

## おわりに

本稿における考察は甚だ不十分であるものの、「フランク王国年代記」に記述されているカール大帝の巡幸はそのほとんどが陸路を主体としているも、それはある一定のルートを経由しているためであり、ローマ街道の完全な存続を意味してはいない。行軍においても中途傷んだ道を補修しており、ローマ街道が完全な形で存続してはいないことを示している。フランクフルトを初めとする新たな道の出現はローマ街道と中世街道の併用が行われていたことを示しているように思える。

今後の課題としては、フランク王国領内での道はどのように維持・管理されていたのかについて、また騎兵を中心とするカール大帝の軍団が行軍するのに十分であったのかについて検討したいと考える。

## 注

（一）水路の研究についてはフリーセン人についての研究が盛んである。デュビィ他著、森本他訳『西欧中世における都市と農村』九州大学出版会、一九八七年、デスピィ「九―十世紀の都市と農村　ムーズ地域の場合」七十一―一二二頁。奥村優子「中世初期ライン地域における交易とフリーセン商人」『史観』一三四、一九九六年、六四―七七頁。

（二）国王証書の書式についての邦語文献は高山博・池上俊一編『西洋中世学入門』東京大学出版会、二〇〇五年、六七―六九頁。レオポール・ジェニコ（森本芳樹監修、大嶋誠、斎藤絅子、佐藤彰一、丹下栄訳）「歴史学の伝統と革新―ベルギー中世史学による寄与―」九州大学出版会、一九九六年、二〇一―二〇五頁。巡幸における年代記の問題については渡部治雄中世ドイツにおける「王道」について―巡幸王権」研究学説」『山形県立女子短期大学紀要』三六、二〇〇一年、十頁を参照。

（三）ジャック・ル・ゴフ（桐村泰次訳）『中世西欧文明』論創社、二〇〇七年、二〇一頁。

（四）カール大帝の巡幸経路については、ノルベルト・オーラ（藤代幸一訳）『中世の旅』法政大学出版局（叢書ウニベルタシス二七四）、一九八九年、二一九頁。滞在回数については下野義朗『西欧中世社会成立期の研究』創文社、一九一頁地図一、一九九二年を見よ。

（五）藤田裕邦「西欧中世初期の修道院における所領と市場―コルヴァイ修道院の事例から―」『社会経済史学』五七―四、一九九一年、三十八―四十頁。

（六）聖人伝にはカール大帝の息子たちが、インゲルハイムからコブレンツ

までの約八〇キロメートルを一日で下ったという。池上俊一『森と川―歴史を潤す自然の恵み―』（世界史の鏡 環境九）刀水書房、二〇一〇年、四四頁。

（七）阿部謹也『中世を旅する人びと ヨーロッパ庶民生活点描』ちくま学芸文庫、二〇〇八年、一六頁。

〈表〉

| | |
|---|---|
| 七七九年 | リッペハムでライン川を渡った。 |
| 七八二年 | 夏に進軍しケルンでライン川を渡った。 |
| 七八四年 | リッペハムでライン川を渡った。 |
| 七八九年 | ケルンでライン川を渡った。<br>ザクセンを通ってエルベ川に達し、木と土で橋を作って渡った。 |
| 七九〇年 | 王はザルツの彼の王宮へマイン川を上流に帆走した。<br>ザルツから彼は再びヴォルムスへ同じ川の流れに沿って帰った。 |
| 七九一年 | ウィーンの北西 Cumeoberg に到着、Kamp に到着。<br>ここまで土手沿いと船で進軍した。 |
| 七九三年 | レーゲンスブルクから川を船で下って、南フランキアに入った。 |
| 八〇六年 | ティオンヴィルからモーゼル川・ライン川を下りナイメーヘンへと行った。 |
| 八一〇年 | リッペハムでライン川を渡りここで軍を招集した。 |

〈参照史料〉

Annales regni Francorum, hrsg. Von Friedrich Kurze, Hannover 1895